

Title	福澤諭吉と複式簿記の伝播
Sub Title	Address, Saturday seminar, Fukuzawa Yukichi Society
Author	友岡, 賛(Tomooka, Susumu)
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2024
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.67, No.5 (2024. 12) ,p.5- 24
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	友岡賛教授退任記念号 講演録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20241200-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

講演録

福澤諭吉と複式簿記の伝播*

友 岡 賛

ご紹介頂きました友岡でございます。「福澤諭吉と複式簿記の伝播」という演題でお話をさせて頂きます。

0. 「会計史」について

「会計史」の稀有性

先ほど、清家先生（福澤諭吉協会理事長の清家篤氏）にも言及して頂きましたように、私は会計学を専門としておりまして、会計学は、大別すると、財務会計論と管理会計論の二つに分けられますが、この分類でいえば財務会計論を専攻しておりまして、また、それに加えて歴史、すなわち「会計史」という分野も扱っております。

まずはこの「会計史」という学問領域の性格、あるいは大学における「会計史」という学科目の性格といったことから、お話を始めたいと思いますが、この「会計史」というものは大学の授業科目についていえば、良くいえばレアものでありまして、要するに余り見掛けない科目でありまして、似たような名称で「会計学史」とか「会計学説史」といった科目は昔から多くの大学に置かれているのですが、「会計史」は滅多にありません。最近の状況は調べておりませんが、二昔位前に調べた際には関東地方においては3、4校程度といった状況でありまして、良くいえばレアもの、悪くいえばニーズがないということになります。私の場合はどうかといえば、30年位前に三田キャンパスに「会計史」という講義を新設し、爾来、担当してきておりまして、慶應義塾の場合はやりたい講義をやらしてくれるという非常に有り難い環境にあるということを幸せに思っているわけですが、ところで、どうしてこの「会計史」という講義を始めることにしたのか、ということをお話しなければなりません。

さて、25年位前に「会計史」のテキストを『歴史にふれる会計学』というタイトルで有斐閣か

* 本稿は一般社団法人福澤諭吉協会の第138回土曜セミナー（2021年3月29日）における講演の記録であり、同協会の『福澤諭吉年鑑』第48号（2021年）に掲載されたものであり、同協会の許可の下、ここに転載する。

ら出したのですが、これは恐らく日本で初の「会計史」のテキストでありまして、これは自慢ではなく、やはりニーズがないということでありまして、世界的にみても恐らく2冊目でありまして、このテキストの表紙にキャッチコピーを書きました。

いわく、「概して無味乾燥なイメージをもたれがちな会計ないし会計学というものに、若干の味われないし潤いをあたえたい。歴史はひとの営みの軌跡であって、それはけっして無味乾燥ではない」。

まさにこの通りでありまして、会計学というものはどうも無味乾燥なイメージがあるわけですが、しかもイメージばかりか、確かにそういった面があるわけですが、歴史の場合、すなわち「会計史」の場合はそうでもないといったことであります。しかし、いずれにしても「会計史」はレアものでありまして、その理由の一つには歴史が浅いということもありまして、例えば日本の場合、日本会計史学会という学会がありますが、この学会もできてから40年も経っていないということでありまして、また、これは日本だけのことでなく、海外に目を向けても、Academy of Accounting Historians というものがありますが、これもまだ50年も経っていないということでもあります。他方、同じ社会科学の史学でいえば、例えば経済史においては社会経済史学会という学会がありますが、これはもう100年位の歴史があります。「会計史」という分野がいまだ成熟をみていないということについていえば、「会計史」を一応、会計学の一分野と捉えた場合、会計学という分野自体の若さ、歴史の浅さということがあります。すなわち、どの学問分野においても、或る程度、その分野が成熟をみてからのち、歴史的なアプローチも用いてみようか、といったいわば余裕が生まれてくるといったことがあるということでもあります。私は商学部というところに所属しておりますが、この商学部で扱っている会計学とかマーケティングとか経営学といった分野は、同じ社会科学の法学や経済学に較べれば若い学問でありまして、会計学においても近年になって漸く、歴史的なアプローチを用いてみようか、といったステージに至ったということがあろうかと思えます。

以上の会計学の若さという点に加えて、会計学という学問の実践性、すなわち会計学は頗る実践的な学問であるとみなされている、という点があろうかと思えます。先述のように、30年位前に「会計史」という講義を新設し、その数年後、『歴史にふれる会計学』というテキストを出したのですが、当時の人々の反応は「会計の歴史なんて考えてみたこともなかった」とか「会計にも歴史があるんだ」などといったものでして、頗る実践的な学問とみなされている会計学というものと歴史というものに乖離があるということでもあります。

ちなみに、お蔭様で、『歴史にふれる会計学』は版を重ねてきておりまして、ただし、類書がないからということもありまして、類書がないということはやはりニーズがないということでもあるわけです。

歴史の言い訳

さて、「会計史」に限らず、およそ歴史というものは、まずは大づかみの通史的なものが書かれ、その後、本格的な歴史研究へと深化し、細分化された対象における緻密な歴史が書かれ、つ

いには、それまでの本格的な歴史研究の蓄積を踏まえて、体系性をもった通史が書かれる、といった段階を踏んでくるものでありまして、「会計史」においても漸く体系的な通史が書かれるようなステージに至ったかな、といった現況ではありますが、そうした会計史書をみても、必ずといってよいほど、冒頭の辺りに、歴史を学ぶことの意義、といったことが書かれております。これは会計の歴史に限ったことではなく、一般に歴史書にはそういったことがありまして、要するに言い訳が書いてあるということでもあります。これについては、どうして歴史はその意義について一々言い訳しなければならないのか、と思うわけではありますが、雑駁な言い方をすれば、歴史というものの概して役に立たないと思われているということでありまして、そのことについて「いやいやそんなことはないですよ」という言い訳をしたくなるということでもあります。そしてまた、「会計史」については、なおのこと、でありまして、先述のように、会計学というものは勝れて実践的な学問と目されておまして、そうした会計学の場合には、なおのこと、役に立たない歴史を学ぶことの意義を言い訳しなければならないというところがある、というわけがあります。意義などといった難しいことは考えずに単純に「こんなことがあったんだ」といったような、知ることの喜びをもたらす、といったことだけで十分ではないか、と個人的には思うわけではありますが、概して言い訳を必要とするというわけでもあります。

会計の特殊性と「会計史」の意義

次に、会計の歴史を講ずる際の、あるいは会計の歴史について書く際の私の前提的な認識について少しくお話ししたいと思います。一言でいってしまえば、『歴史にふれる会計学』のキャッチコピーにも言及されていたように、会計ないし会計学というものは余り面白くないが、しかし、歴史という視点をを用いると、そうでもない、といったことであります。

さて、例えば本のタイトルを引き合いに出しますが、『○○は面白い』とか『面白い○○』とかいった本は少なくないわけでありまして、会計の場合にも『面白い会計学』といったタイトルのテキストをみた記憶がありますが、こういったタイトルは、一般にはつまらないと思われているものについて、いやいやそうでもないですよ、といった意味でもって付けられるわけでありまして、例えば昔、『イギリスはおいしい』というベストセラーがありましたが、これもその一つで、一般にイギリスの料理は美味しくないと思われている、という前提的な認識があるわけがあります。しかし、私がこれからお話ししようとしていることは、会計は面白い、という話ではなく、やはり会計はつまらない、という救いがない話であります。しかし、いま少しもっともらしい言い方をすれば、会計ないし会計学に余り縁のない方々に会計ないし会計学の性格ないし特殊性といったものを説明させて頂きたいということでもあります。

昔、講談社の或る雑誌に「会計が関心をもたれない理由」というエッセイを書いたことがありまして、それは20数年前に講談社から『株式会社とは何か』という新書を出した頃でありまして、問題はその新書のタイトルにありました。それはどういうことかといいますと、最初、講談社から、新書を書いて下さい、といわれたときには『会計の云々』といったタイトルが予定されていたのですが、その執筆依頼を受けて2、3週間後、電話が掛かってきまして「やはり『会計』と

いうタイトルはやめておきましょう」といわれました。さらにいわく、「やはり会計の本として出すのはやめておきましょう。新書ですから」。すなわち、新書というものは沢山売れることが予定、期待されているわけでありまして、沢山売れてくれなければ困るわけでした、そうした新書を会計の本として出すのは無理、ということでありまして、結局、『株式会社とは何か』というタイトルになったというわけですが、その際に、どうして会計の本では無理なのか、と色々考えまして、それを「会計が関心をもたれない理由」というエッセイに書いたというわけでありまして。

しかし、その後、あちこちの出版社から会計の新書が出るようになりまして、2000年代のことですが、そのなかで最も有名なものが公認会計士の山田真哉氏が書かれた『さおだけ屋はなぜ潰れないのか?』でして、慥か170万部の大ベストセラーになりました。そして、その頃、急に会計本ブームというのがありまして、新書に限らず、会計絡みの本が次々とベストセラーになった時期がありまして、どうしてだろう、ということで、些か分析しまして、その分析結果をまとめて『なぜ「会計」本が売れているのか?』という本を出しまして、そこでの私の結論は、会計本ブームといわれ、売れている会計本は実は会計の本ではない、ということでありました。些か専門的な話をしますと、会計においては、収益マイナス費用イコール利益、という形で利益計算を行うわけですが、これは会計の話で、また、どういうものが収益か、どういうものが費用か、ということも会計の話ですが、しかし、会計の話はそこまでです。しかし、人々が知りたいことは、どうしたら収益を増やせるか、どうしたら費用を減らせるか、ということでありまして、『さおだけ屋』を首めとして当時のベストセラーは、どうしたら収益を増やせるか、どうしたら費用を減らせるか、ということ述べているわけですが、実はそれは会計の話ではなく、経営の話ということでもあります。どうしたら売上を増やせるか、どうしたら費用を抑えられるか、といったことは最早、会計の話ではない、ということでもあります。

しかし、いずれにしても、会計も以前よりは少しは注目されているようでありまして、これも20年位前のことですが、NHKの7時のニュースをみていましたら、当時はまだ大蔵省でしたが、大蔵省の企業会計審議会というところのニュースが出てきまして、この大蔵省の企業会計審議会というのは日本の会計基準を作成していた機関ですが、そのニュースをみてびっくりしたわけがあります。それは、テレビに会計のことが出てくるなんて！ という驚きでありまして、また、新聞についても、以前は、あくまでも一般紙ではなく、『日経』ですが、『日経』の二面、三面に「会計云々」という見出しをみて驚いたものですが、近頃は、たまにはありますが、一面のトップに「会計云々」ということも珍しくありません。ただし、その多くはバッドニュースです。

これもまた、かなり前のことですが、某誌に次のようなエッセイを書きました。

例えば懇親会や結婚披露宴とかに行って、色々な人と名刺交換をすると、相手の方に「どんなご研究をされているんですか」と訊かれるわけですが、そういうときに例えば「マーケティングをやっています」という答えの場合はとりあえずは「ほお、面白そうですね」という感じで和やかな会話が續くらしいのですが、「会計学をやっています」という答えの場合は「……」という感じで「難しそうですね」といったお世辞がせいぜいで、気まずい沈黙になったり……。

といったエッセイを書いたのですが、しかし、最近はそうでもなく、例えば昔は講演を頼まれた際に「会計っぽい話は少なめにして下さい」といった注文が付いたものですが、最近は「是非、会計の話をお願いします」といわれたりもします。少し変わってきたという感じがするわけですが、しかし、人々が会計に関心をもつ時代というものは余り良い時代ではないという気もするわけでありまして、例えば、粉飾倒産事件が起きた、などといったバッドニュースのときに一時的に俄かに脚光を浴びる、といった存在であるような気がするわけでありまして。

さて、一言でいってしまえば、会計は地味なものである、ということになり、だから、関心をもたれにくい、ということになりますが、その理由としては、会計はスタティックで無味乾燥である、ということを経験することができます。

オフィスオートメーションが進化し、コンピューター化が進み、今日の企業における会計処理はコンピューターで行われているわけですが、しかし、そうした今日においてさえ、「会計」という言葉を聞いて人々が抱く典型的なイメージの一つはカネ勘定、いま一つは帳簿付けであると思われます。そして、この後者は、むしろ、今日においては、帳簿付けなどではなく、OAで行っているわけですが、要するに簿記のイメージでありまして、こうした、会計イコール簿記、といったイメージはかなり一般的なものでしょうし、先ほどは「今日においてさえ」といった些かネガティブな言い方はしましたが、しかし、そうした認識は旧態依然としたもので今日には妥当しない、というわけでもありません。

いかに現実の会計業務がコンピューター化されようとも、そこで用いられているシステムの仕組みそれ自体は昔、手にペンをもって帳簿に書き込んでいた時代と何も変わっていないわけでありまして、そうした意味からすれば、このようなイメージは今日においてもなお妥当するわけがあります。先ほど、「旧態依然」という言い方をしましたが、旧態依然というのは、元のままで少しも進歩発展がない、ということで、概してネガティブなニュアンスをもって用いられがちな言い方ですが、しかし、この文脈ではあながちそうでもないわけでありまして。簿記の歴史についてはこれからお話しますが、私達が一般に用いてきている簿記は「複式簿記」と呼ばれるものですが、この複式簿記は実に数百年、約800年もずっと同じものを用いてきているわけでありまして、この複式簿記はときに、人類の最高の発明の一つである、とか、絶対的な完全原理である、といったように評され、或る意味において完璧な、完成しつくされたものであって、しかるがゆえに、元のままで少しも進歩発展がない、というか、進歩発展の必要がない、というわけでありまして。よく引き合いに出される話ですが、かの文豪ゲーテが或る小説において登場人物に「複式簿記というものは人類の最高の発明の一つだ」といわせているわけでありまして、しかし、何百年も変わらない、800年も同じシステムを用いてきている、という旧態依然性、不変性は或る意味において会計にスタティックな、静的なイメージを与えている、という気もするわけでありまして。また、行列の理論で有名なケンブリッジの数学者アーサー・ケーリーは次のように述べております。「複式簿記の原理はユークリッドの比の原理に匹敵する絶対的な完全原理である。それが極めて簡明なものであるということが、むしろ簿記をして無味乾燥ならしめているのである」。会計はスタティックで、そして無味乾燥なものである、ということでありまして。

次に会計を対象とする会計学について考えてみますと、会計学という学問は余り身近なものではない、ということがあります。会計学という学問は一般的な理解としては勝れて実践的な学問ですが、しかし、それにもかかわらず、一般の人々にとっては余り身近なものではない、というところがあります。例えば哲学のように、象牙の塔の住人だけがマニアックにやっているといったイメージの学問がそうした意味において身近ではない、というのであれば分かるのですが、しかし、会計学の場合は決してそうではないわけであります。

これについてはいくつかの理由が考えられますが、一つは会計学はその対象が或る意味において世のなかの動きそのものではない、ということがあります。会計学の対象は、むしろ、会計ですが、この会計については「会計は事業の言語である」、「language of business である」ということがよくいわれます。言語というものは何かを表現して人に伝える行為であります。私達は何かを表現しようとする場合に言葉というものをを用いるわけでありまして、会計には会計固有の言葉があります。言葉というものは一定のルール、すなわち文法にしたがって文字や記号を連ね、それによって何かを表現するものでありまして、私達は会計固有の言葉を用いることによって企業の経営活動を表現する、ということで、これが会計という言語行為であります。例えば経済学とか経営学といった分野の場合、それらの対象は経済活動や経営活動といった世のなかの動きそのものですが、会計学の対象は表現行為でありまして、企業の経営活動を表現して人に伝えるという行為ということで、或る意味において世のなかの動きそのものではない、ということであります。

また、先ほど、会計に対する典型的、一般的なイメージの一つにカネ勘定を挙げましたが、カネ勘定については、カネ勘定などといったものは下賤だ、などといって、軽蔑する、あるいは軽蔑するふりをする人がよくいるわけでありまして、しかし、実は下賤なものほど面白いわけでありまして、さて、ここでの問題は何かといえ、この文脈で本当に面白いものはカネ儲けという下賤なものであって、カネ勘定それ自体が面白いわけではない、ということであります。カネ勘定が面白いのは、こんなに儲かった、という意味においてでありまして、カネ勘定それ自体が面白い、楽しいということではないわけでありまして。先ほどの会計本ブームの話において、収益マイナス費用イコール利益、といった話をしましたが、会計というのは単なるカネ勘定であって、カネ儲けではない、ということであります。

さらにまた、会計固有の言葉における文法に該る簿記のルール、これが人によっては非常に取っ付きにくいということもあります。学生時代に経済学部ないし商学部ないし経営学部だったので簿記の授業を取らなければならなかったが、無味乾燥で取っ付きにくくて、つまらなかった、といった記憶しかないという人も少なくないだろう、ということであります。

それにまた、会計学という学問の必要性というか、意義というか、会計学というものはいったい何をするのか、ということをよく一般の人に訊かれるわけでありまして。例えば経済学であれば、経済という複雑な事象を解き明かす、といったような意義が少なくともイメージとしてはあるのかもしれませんが、会計学については、会計なんて所詮、カネ勘定や帳簿付けじゃないのか、そんな単純なことの何を研究するんだ、といったような思われ方をしているというわけでありまして。

例えば企業の経営活動、すなわち経営という行為についてなら、どうしたら利益を増やせるか、利益を増やすためにはどうしたらいいか、といった問題が存在している、ということは誰もが認識しているわけですが、会計という行為についてはそうでもないわけでありまして、会計についてはまた、より良い会計を行うためにはどうしたらいいか、といった問題があるわけですが、一般の人々にすれば、そうした問題はおよそ意識されないわけでありまして、先ほども言及したように、例えば粉飾倒産事件などといったバッドニュースが世間を騒がせたときでもなければ、人々は会計に関心をもたない、というわけであります。

先ほど、会計というものは或る意味において世のなかの動きそのものではない、という言い方をしましたが、むしろ、会計も一つの行為ですから、世のなかの動きではありますが、しかし、ことの表面には出てこないスタティックな動きでしかないということでもあります。「経済活動」とか「経営活動」とかいった言い方はありますが、「会計活動」となどという言い方は聞いたことがない、というわけであります。

最近、「ダイナミズム」というコンセプトを旗印に会計をダイナミックなものとして捉えよう、あるいは会計にダイナミズムを認めよう、といったアプローチを用いる学者が散見されますが、しかし、殊更にダイナミズムやダイナミックさを強調しようということは相対的にスタティックなものである、ということのエビデンスだろう、と思われるわけであります。

いずれにしても、スタティックなものは意識されにくく、カネ勘定や帳簿付けは、むしろ、大切ではあるが、しかし、そこにも、より良いカネ勘定、より良い帳簿付け、といった問題が存在する、ということは一般には意識されにくいということでもあります。

さて、以上のような会計をいかに扱うか、ということでありまして、これは、私がどうして「会計史」という講義を設けたのか、ということに繋がるわけですが、このような会計を歴史的に扱ってみよう、ということでもあります。これについては、歴史だって地味じゃないか、地味な会計の地味な歴史だったら、地味々々じゃないか、といった突っ込みをよく受けるわけですが、少なくとも歴史は取っ付きが良い、ということがあります。例えば先ほど新書の話をしてしましたが、新書のような一般向けの教養書の類いでも、例えば経済学や金融論などの場合、最初の数頁は簡単でも、さらに読み進むと、やはり或る程度はテクニカルタームやセオリーを理解しないと読み続けられない、というわけですが、しかし、これが経済史や金融史の場合は比較的そうでもない、ということでもあります。へえ、こういうことがあったんだ、といったように、歴史はいわばお話として読める、ということでもあります。会計についても同様で、例えば、会計には簿記が必須、などといわれ、簿記が一つの参入障壁になるわけですが、会計の歴史であれば、簿記のセオリーを知らなくても読める、ということでもあります。それにまた、いうまでもなく、歴史はスタティックではない、ということでもあります。歴史というものは、或るものが経てきた変遷の姿、時の経過に伴って移り変わってきたそのプロセス、でありまして、歴史はプロセスであって、そこには当然に動きがあり、会計も歴史的に扱うことによって、そこにダイナミズムをみることができる、というわけであります。

会計史の見方

さて、漸く、いよいよ本題であります。まずは、歴史をどのように扱うか、ということがありますが、これは会計の歴史に限ったことではなく、歴史一般の問題でありまして、空間軸と時間軸をどう扱うか、という問題であります。要するに、いつの時代、どの地域を扱うのか、ということですが、これについては14・15世紀イタリア、16・17世紀ネーデルラント、18・19世紀イギリス、という見方をします。すなわち、14・15世紀にはイタリアをみる、16・17世紀にはネーデルラントをみる、18・19世紀にはイギリスをみる、ということで、時代が違えば場所を違えてみてゆく、というアプローチであります。また、この14・15世紀イタリア、16・17世紀ネーデルラント、および18・19世紀イギリスにはそれぞれ会計の歴史上、重要なトピックを見出すことができます。複式簿記の成立、期間計算の成立、および発生主義の成立ですが、今回は期間計算と発生主義の話は割愛します。

いずれにしても、14・15世紀イタリア→16・17世紀ネーデルラント→18・19世紀イギリス、という経路に会計の通史をみてゆこうということですが、この経路は、大雑把な言い方をすれば、経済発展、資本主義経済の発展ルートにはほかならないわけでありまして、14・15世紀にあつてはイタリア、16・17世紀にあつてはネーデルラント、18・19世紀にあつてはイギリスが世界経済、この場合はヨーロッパ世界ですが、世界経済のセンター、最先端であつた、ということで、したがって、この経路は資本主義経済の発展ルートにはほかならない、というわけで、この経済発展のプロセスにおいて会計の変遷をみてゆこう、ということになります。そこには、経済発展のプロセスにおいて、その発展によつてもたらされた新しい状況が新しい会計を必要とする、といったシナリオが想定されている、ということになります。

ちなみに、中世イタリア、14・15世紀イタリアといえは、商業革命の時代でありまして、シンボリックなものは、むしろ、ルネサンス、それから次の時代は16・17世紀ネーデルラント、都市名を挙げれば、アントウェルペンとアムステルダムで、シンボリックなものは東インド会社、次の18・19世紀はいうまでもなく産業革命のイギリス、ということになります。そして、会計においては中世イタリアに成立をみた複式簿記が16・17世紀に各地に伝播をみ、また、これは何も複式簿記に限ったことではなく、中世イタリア商人はさまざまな経済のツールを発明しており、そのさまざまな経済のツールが16・17世紀に各地に伝播をみ、そして産業革命のイギリスへと繋がってゆく、という流れになっているということになります。

1. 複式簿記の成立

複式簿記の意義

さて、まずは複式簿記ですが、その前に簿記とは何かです。簡単にいってしまえば、簿記は記録ですが、もう少し具体的には財産に関する記録で、何のための記録かといえば、色々な目的がありますが、原初的な一義的な目的は財産管理です。財産を管理するためにそれについて記録を行う、ということになります。次に複式簿記ですが、複式簿記の vs. は単式簿記、すなわち、単

式簿記 vs. 複式簿記、ということになるわけですが、その辺りの些か難しい論点は割愛しますが、複式簿記は英語では「double-entry bookkeeping」といい、double-entry は複式記入、bookkeeping が簿記ですから、文字通り、逐語的に読めば、複式記入による簿記、ということになります。では、複式記入とは何か、については、会計の対象は取引ですが、この取引というものを二面的に把握した形でもって、帳簿に記入する、ということでもあります。なお、ここにおける取引、すなわち会計における取引は、簡単にいえば、財産の増減をもたらす事象、であります。よく入門的な会計学のテキストの最初の辺りに、日常用語でいう取引と会計においていう取引は違う、ということが書いてありまして、典型的な例として盗難や火災が挙げられるわけあります。すなわち、盗難に遭った、倉庫の商品を盗まれてしまった、といったことは一般には、むしろ、取引とはいわないわけですが、会計においては、商品という財産が減少した、という意味において取引として捉えられることになります。また、火災で店舗の建物が焼失した、といったことも、日常用語では取引とはいいませんが、これも、建物という財産がなくなった、という意味で会計上は取引として捉えられる、というわけであります。

そして、そうした取引については、そもそも取引自体に二面性がある、とされます。例えば、土地を購入した、という場合には、購入代金が支払われるとともに、その土地が所有物になる、というわけで、すなわち、土地の購入という取引は、現金という財産の減少と土地という財産の増加、の二つから成る二面的な事象として把握されるわけであります。また、人におカネを貸した場合には、それだけのおカネが借り手の手に渡るとともに、貸付金という債権が生ずる、というわけで、すなわち、現金という財産の減少と貸付金という財産の増加、の二つから成る二面的な事象として把握されるわけであります。そして、このように、取引というものを二つに分解して把握し、記録する、ということが複式記入、というわけであります。

さて、こうした複式記入というものの成立は、歴史的には、勘定というものの生成プロセスにおいて捉えられます。

勘定とは何か、ですが、会計において財産の増減などを記録するための細分化された単位を勘定といいます。例えば現金勘定とか商品勘定とかいったものですが、この勘定というものが實在勘定というものと名目勘定というものに二大別され、それからまた、實在勘定が人名勘定と物財勘定に二分され、歴史的には、まず實在勘定が生成し、そして名目勘定が生成をみたということになり、さらに細分化すれば、まずは人名勘定、次いで物財勘定、そして名目勘定という順に生成をみてきたと一般に捉えられております。

最初の人名勘定というものは、要するに、債権債務を記録する勘定でありまして、例えば田中さんに30万円貸したとか、鈴木さんに50万円借りた、といったことを記録するために、田中さん勘定とか、鈴木さん勘定を設ける、ということでもあります。そして、簿記というものはまずは債権の備忘記録から始まったといわれておりまして、この債権の備忘記録というものは、すなわち、人におカネを貸した場合にそのことを忘れてしまわないように、田中さんに30万円貸した、という記録をしておく、ということでもあります。これは貸し手としては当然に行われるべきことであって、そしてまた、カネ貸しという行為は古くから、古代ローマ、あるいはそれ以前から行わ

れていた行為であって、こうした記録も古くから行われていた、というわけであります。こうした意味において、まずもって生成をみたのは人名勘定というわけであります。ただし、債務、すなわち借り手の側はどうだったかは些か微妙でありまして、人におカネを借りている場合にそのことを忘れてしまわないように、鈴木さんに50万円借りた、という記録をしておく、ということが借り手として当然に行われることかどうかは微妙ですが、債権については当然に、ということでもあります。

次に物財勘定ですが、これは現金勘定とか、土地勘定とかいったものでありまして、例えば庭先に牛を3頭飼っているといった場合は、目視できるため、わざわざ記録することもないわけですが、裏山に牛が何百頭、羊が何千頭といった場合には、或る意味において、インビジブルな存在になっているため、そうした物財を管理するために記録をする、ということが行われるようになる、ということでもあります。

もう一つが名目勘定ですが、この名目勘定というものは、要するに、会計的な言い方をすると、収益ないし費用の勘定でありまして、これは財産の増減の原因を示すものとされておりまして、複式記入というものはこの名目勘定の生成をもって成立した、とされておりまして、すなわち、名目勘定の生成によってすべての取引を二面的に把握することができるようになる、ということでもあります。先ほどの例のように、人におカネを貸した、あるいは土地を購入した、という場合には人名勘定や現金勘定や土地勘定という実在勘定だけでもって二面的に把握することができますが、例えば、使用人に賃金を払った、という場合には実在勘定だけでは二面的な把握ができません。おカネを払ったわけですから、現金という財産の減少という面は把握できますが、二面的な把握はできません。そこで賃金勘定という名目勘定が用いられることになります。この賃金というものは、会計的にいえば、費用であって、費用の勘定は財産の減少の原因を示すというわけであります。名目勘定を用いることによって、現金という財産の減少およびその原因としての賃金の支払い、という二面的な把握ができるようになる、というわけであります。このように、名目勘定が生成をみて初めてあらゆる取引を二面的に把握することができるようになった、というわけであります。

ただし、こうした複式記入、二面的な把握というものは、あくまでも、複式簿記の必要条件であって、十分条件ではない、とされておりまして、複式簿記には体系性が需要であるとされておりまして、複式記入を必要条件として体系的に行われる記録、これが複式簿記とされておりまして、先ほど、簿記は財産に関する記録であって、その目的はまずは財産管理であると述べましたが、財産を管理するために行われる体系的な記録、これが複式簿記というわけであります。さらに、財産を管理するために何を記録するのか、というと、これはまずは財産の在り高と増減でありまして、どれだけの財産があるか、あったか、そしてそれがどれだけ増減したか、ということ記録するわけでありまして、これを大雑把に言い換えれば、要するに資本と利益に関する記録、ということになります。元々どれだけの財産があるか、あったか、という元々の財産は元手、すなわち資本でありまして、それが増えたら増えた分は儲け、すなわち利益、ということになるわけであります。あらましこうした意味における資本と利益を対象として体系的に行われる記録、こ

それが複式簿記というわけであります。

しかし、この体系性というものは非常に漠とした曖昧模糊な概念でありまして、したがって、論者によって色々な解し方があるわけでありまして、したがって、複式簿記とは何かということについても諸説があるということになり、それが起源論にも繋がってくるわけであります。

複式簿記の起源

複式簿記の起源については諸説がありまして、一つは古代ローマ説であります。先ほど、古代ローマからカネ貸し業はあったといった話をしましたが、その古代ローマに複式簿記の成立を認める説があるのですが、しかし、直接的なエビデンスがなく、推察の域を出ないということで一般的には支持されておられません。そこで一般的には中世イタリアに起源が求められております。

しかし、その中世イタリアの色々な古い史料を対象としてマニアックな学者がマニアックな研究をしているわけですが、そこにも色々な説がありまして、これは複式簿記に限ったことではなく、〇〇の起源とか〇〇の誕生とか〇〇の成立などといった議論をする場合にはその〇〇の定義、何をもって〇〇とするか、ということがその前提となるわけですが、複式簿記とは何か、ということについて色々な説があるわけであります。中世イタリアの商人については色々な史料がありまして、中世イタリア商人は記録マニアなどと呼ばれておりまして、不安定な中世社会において、武力をもたない商人とすれば、自らの財産を守る唯一の手段が記録だったというわけでありまして、中世イタリア商人は非常に事細かに色々な記録を行っておりまして、アーカイブスに色々な史料が残っているわけであります。そうした中世イタリア商人の記録、帳簿の類いを調べて、マニアックな学者が云々するわけですが、例えば或る古い帳簿をみて、或る研究者はそこに複式簿記の存在を認めるかもしれませんが、他の研究者はそれをみて複式簿記の存在を否定するかもしれない、というわけであります。何をもって複式簿記の要件とするかが違えば、どこに複式簿記の起源を求めるかも自ずと違って来る、ということであります。したがって、色々な説があるわけですが、ちなみに、諸説のなかで最も古いものはどの辺りかということ、13世紀の初頭でありまして、より具体的には1211年のフィレンツェの両替商の帳簿というものが残っておりまして、それを複式簿記の最古の史料として認めるという説であります。これを起点とすれば、約800年ということになるわけですが、先ほどもいいましたように、これは複式簿記の定義付けの問題でありまして、大雑把に複式簿記の起源は中世イタリアに求められる、というものが通説であります。

ルカ・パチョーリの『スムマ』

次にルカ・パチョーリの『スムマ』の話をしますが、これは中世イタリアにおける複式簿記の起源、成立といった話題において最も有名なトピックでありまして、会計史などといったマニアックなものでもなくとも、普通の会計学ないし簿記の入門書の類いでも、その序文の辺りにしばしば登場してくる人物がルカ・パチョーリでありまして、ときに複式簿記の祖などとして紹介される人物であります。いい加減な簿記のテキストの類いに、簿記は中世イタリアのお坊さんが発明した、といった記述があつたりもしますが、この記述は正しくありませんが、そこで言及され

ている人物がルカ・パチョーリであります。このルカ・パチョーリは中世イタリアのルネサンス期の人物でありまして、レオナルド・ダ・ビンチに代表されるイタリアン・ルネサンスの輝ける群像の端っこくらいにはいたかな、といった人物でありまして、数学者であります。数学者であるとともに修道僧でありまして、先ほどのお坊さんという記述はこの修道僧ということに由来しているわけであります。さて、ルカ・パチョーリは15世紀の半ばに生まれ、数学の道に進んでイタリアの各地の大学で教鞭をとり、いくつもの数学書を著しております、このパチョーリが1494年にベネチアで刊行したものが『スムマ』という書であります。この『スムマ』という書名は略称でありまして、本当のタイトルは *Summa de Arithmetica, Geometria, Proportioni et Proportionalita* でありまして、直訳すると『算術、幾何、比、および比例に関する全書』ということになりますが、些か長いということで、最初の Summa, これは『全書』ですが、そこだけをとって一般にパチョーリの『スムマ』と呼ばれ、知られております。これは要は数学全書でありまして、その第1部第9篇第11論説というところで簿記を説いております。この書は600頁強のもので、そのうちの30頁弱ですが、そこで複式簿記を、当時のベネチアにおいて一般に行われていた複式簿記を解説しているわけでありまして、そこでこの『スムマ』はときに世界最初の複式簿記書などと呼ばれ、知られているわけであります。もっとも数学書でありまして、そのなかで複式簿記を取り上げているというわけで、複式簿記書という言い方は相応しくないかもしれませんが、世界で初めて複式簿記を取り上げた書ということで、しかるがゆえに、ルカ・パチョーリはときに複式簿記の祖などとして紹介されているというわけであります。

先ほど、いい加減なテキストにおける記述、簿記は中世イタリアのお坊さんが発明した、といった記述に言及しましたが、お坊さんが発明したわけではありませんで、パチョーリが発明したわけでもないのに自分で発明したかのようにパクっているわけでもありません。事実、その第11論説というところでパチョーリも次のように述べております。本論説では記帳の方法について解説する。ここではベネチアにおいて用いられている方法を取り上げる。簿記には色々な方法があるが、自分とすれば、このベネチアにおける実践が最も推奨に値するからである。このように述べております。

ちなみに、このルカ・パチョーリが数学者としてどうであったか、どのくらい偉かったかといえますと、些か微妙でありまして、ユークリッドやピタゴラスのように独創的な研究をなしたといったことはなく、また、人名事典の類いをみると、ルカ・パチョーリの解説のなかには、レオナルド・ダ・ビンチの友人だった、ということが必ず書いてありまして、有名人の友人だった、という紹介のされ方でありまして、他方、レオナルド・ダ・ビンチの解説には、もちろん、パチョーリの名前は出てこないわけでありまして、その程度の人物というわけではありますが、しかし、この『スムマ』は当時の数学の集大成でありまして、数学の歴史にそれなりの地位を有し、そうした性格の書としては歴史的に価値あるものとして広く長く読まれてきているわけであります。

ところで、この書が会計において有する意義ですが、会計におけるルカ・パチョーリの貢献ないし『スムマ』の意義は複式簿記の伝播にほかなりません。この『スムマ』は1494年の刊行であ

りまして、ドイツのゲーテンベルクが活版印刷の技術の実用化に成功したのが15世紀の半ばでありまして、実はパチョーリの『スμμα』は最初期の印刷書であります。最初期の印刷書という点の一つの特徴でありまして、印刷書だったということにどういう意味があるかといえば、印刷書であったがゆえに多くの部数を作ることができ、したがって、広く読まれることができた、ということであります。パチョーリはこの書をベネチアで刊行しておりますが、当時のベネチアはイタリア、そしてヨーロッパにおける出版文化の中心地でありまして、当時、全ヨーロッパの出版物の過半数がイタリアで出版されており、また、イタリア中の出版物の過半数がベネチアで出版されていた、というデータがありまして、すなわち、全ヨーロッパの出版物の4分の1以上がベネチアで刊行されていた、というわけであります。そうした出版文化の中心地ベネチアにおいてはさまざまなタイプの出版物が刊行され、先駆的な出版物が刊行されておりました、印刷書もその一つということで、ベネチアにおいては『スμμα』を首め、先駆的な印刷書が次々と刊行されております。また、いま一つの特徴は『スμμα』は俗語で書かれていたということでもあります。これも、ベネチアならではのことでありまして、俗語で書かれた書も先駆的なものでありました。なお、ここにいる俗語はスラングということではなく、この文脈における俗語は、ラテン語ではない、ということでもあります。この時期以前の出版物はすべてラテン語で書かれていたわけでありまして、ここでいう俗語はイタリアであればイタリア語、フランスであればフランス語ということでありまして、この当時、出版文化の最先端ベネチアにあって漸く俗語で書かれた出版物が出てきた、ということでもあります。かつてラテン語の読み書きは上流の教養人の証であって、上流階級の子弟の勉強はまずはラテン語の読み書きということでありまして、逆にいえば、一般の人々はラテン語の読み書きができず、そして本はすべてラテン語で書かれていたことから、一般の人々は本が読めない、というわけでありましたが、ここで漸く俗語の本が出てきた、というわけであります。『スμμα』は俗語、すなわちイタリア語で書かれていたために一般の人々にも読まれることができた、ということでもあります。

このように、パチョーリがどれくらい偉かったかはさて置き、『スμμα』は最初期の印刷書にして最初期の俗語本であった、ということで広く読まれえた、ということでもあります。

そうした『スμμα』は複式簿記の伝播の媒体として大きな意味をもっておりました。先ほど、複式簿記を扱った部分は約30頁といいましたが、のちにその部分だけが小冊子とされ、また、各地において翻訳されておりました、これはそうしたニーズがあった、ということでもありまして、このルカ・パチョーリの『スμμα』は複式簿記伝播の媒体として意味をもった、ということでもあります。

なお、この『スμμα』の特に初版本は多くは残っておりませんが、慶應の三田の図書館には所蔵されております。購入されたのは、先述のように、私が30年位前に「会計史」という講義を新設した頃でありまして、その記念といたら語弊がありますが、色々な古書業者に探してもらって見付かりました。おカネの話をするのも語弊がありますが、1,600万円ということで、当時としてはそれまでに慶應義塾が買った1冊の本としては最高額ということで、推薦状を書いたのですが、もっと長く1,600万円分の推薦状を書いて下さい、といわれました。しかし、先日、アメ

リカの本屋のカatalogをみておりましたら、1億3,000万円の値が付いておりました。しかし、ご存知のように、慶應義塾はその後、この『スμμα』を購入した5、6年後に先ほど言及しましたグーテンベルクの聖書を買って、これが8億円ということで、一挙に1位の座を奪われてしまいました。別に争っているわけではありません。

それはさて置き、いずれにしても、ルカ・パチョーリの『スμμα』は慶應の図書館にあるということでもあります。ちなみに、慶應の図書館は毎年、丸善との共催で慶應義塾貴重書展というものを開催しておりまして、何年か前、8年か9年前に『ルカ・パチョーリの『スμμα』から福澤へ』という展示会を日本橋の丸善で行いました。今日の演題と似ておりますが、ルカ・パチョーリの『スμμα』の初版本を慶應の図書館が蔵しており、福澤は、もちろん、慶應義塾の福澤ということで、その辺りをまとめた企画でありまして、私が監修を務めました。なお、その際に作成した友岡監修の冊子ですが、三田の図書館の受付の辺りで販売しておりますので、よろしければお問い合わせ下さい。私に印税が入るわけではありません。

2. 複式簿記の伝播

資本主義経済の発展と複式簿記の伝播

さて、複式簿記の伝播ですが、もちろん、ルカ・パチョーリの『スμμα』のみをもって複式簿記が伝播をみていったわけではありませんが、いずれにしても、中世イタリアに生成をみた複式簿記が伝播をみていったわけでありまして、どうして伝播をみたのかといえば、記録システムとしての複式簿記の卓越性、ということでありまして、むしろ、簿記というのは、イタリアのみならず、各地において商人の実践のなかで商人の知恵として生まれ、各地の商人がそれぞれに事業や財産を管理するための手段として行っていたわけですが、そこにイタリアから複式簿記が伝播をみていった、ということでもあります。ちなみに、他国においては Italian bookkeeping、イタリア式簿記といった呼称が用いられておりますが、イタリア式簿記はイコール複式簿記でありまして、そうしたイタリア式簿記が各地に伝播をみて、各地の固有の簿記が淘汰されてゆく、ということでもあります。複式簿記の卓越性、記録の手段として卓越性がこうした淘汰をもたらしたということでもあります。

なお、こうした伝播はしばしば資本主義経済の発展と結び付けて捉えられておりまして、例えばマックス・ヴェーバーやシュンペーターやゾンバルトが引き合いに出されますが、彼等は資本主義の発展の重要なファクターの一つとして複式簿記を捉えておりまして、例えばゾンバルトは、複式簿記がなかったら資本主義というものはない、とまでいっております。それからまた、ドイツの経済史家のオイケン氏は、ドイツ経済史において、16世紀の頃、経済発展が著しかった南ドイツにおいては複式簿記が用いられており、経済発展が遅れていた北方のハンザ同盟では複式簿記の採用がみられなかった、ということを指摘しております。

知識の伝播と実践の伝播

しかし、伝播というものは、これは複式簿記に限ったことではありませんが、知識としての伝播と実践としての伝播はイコールではない、ということに留意する必要があります。知識としては伝わっていても、そこに必要がなければ実践としての採用はない、ということでもあります。例えば各地の商人達が些か未熟な簿記を行っていて、そこにイタリア式の卓越した簿記が伝わってきたとしても、自分達は自分達の簿記で事が足りているのであれば、イタリア式簿記の卓越性を認識したとしても、自分達は自分達のやり方で間に合っているということで、採用には至らない、ということでもあります。知識として伝播をみても、ニーズがない限りは実践としての採用はない、ということでもあります。

なお、知識 vs. 実践という話に加えて、実践 vs. 文献という対比の話もありまして、『スμμα』の刊行は15世紀末ですが、それから100年、150年くらいの間は実践 vs. 文献ということでいえば、実践が先にありき、実践先行の時代でありまして、『スμμα』もそうでしたが、まず実践があって、それを本にまとめるという関係にありましたが、それがやがて逆転をみるということになるわけであります。

さて、複式簿記の伝播は、国によって温度差はありますが、まずは16・17世紀が伝播の時期でありまして、その頃の会計史上の注目すべき文献としてはジャン・インピンの著書が挙げられます。このインピンはアントウェルペンの商人で、『新しい手引き』という略称の書でありまして、商人のためのマニュアルといった性格の本ですが、そこで複式簿記が取り上げられておりまして、新しい点としては期間計算に関する記述が認められ、これがルカ・パチョーリの時代よりも進化している点ですが、期間計算の話は今日は割愛させていただきます。さて、このジャン・インピンの書は最初はオランダ語、フランドル語で書かれていたのですが、すぐにフランス語版と英語版が出ておりまして、これもまたニーズがあったからこそ、そうした翻訳が出されたわけでありまして、これがフランスやイギリスへの複式簿記の伝播の媒体として意味をもってくるわけでありまして、ちなみに、今日はフランスの話はいたしません、会計史におけるフランスの意義は商法にありまして、色々な法律のなかで最も会計に関係があるものは商法ですが、この商法はそのルーツをフランスに求めることができるわけでありまして、ルイ14世の時代の商事王令ないし商人法典などと呼ばれるものが商法のルーツでありまして、この商事王令のなかに複式簿記関係の規定を見出すことができるわけでありまして、すなわち、ジャン・インピンの書のフランス語版などを媒体として複式簿記がフランスに伝播をみていった、ということでもあります。

フランスの話はさて置き、イギリスにも複式簿記、イタリア式簿記が伝播をみてゆくわけですが、インピンの本の英語版もその一つですが、17世紀前半くらいまでのイギリスは多くはネーデルラント経由で複式簿記が伝播をみておりまして、その頃になると文献と実践の関係でいうと、実践が遅れて文献が先行するという関係になってきております。

そもそもイギリスにイタリア式簿記が伝わったのはいつ頃かという、これは実は古く15世紀でありまして、これは伝播の意味にもよりますが、15・16世紀のロンドンにはイタリアの商人達が支店を構えておりまして、ベネチアの商人達が多く居住しておりまして、現在、ロンドンの金

融の中心として知られるシティーにロンバード・ストリートという有名な通りがありますが、これはイタリア北部のロンバルディア地方に由来する名前でありまして、かつてロンバルディア出身のイタリア人達がここで金融業を営んでいたということに由来しておりますが、当時、15・16世紀にイタリアの商人達が居住しており、そこではイタリア人がイタリア式簿記を行っていたということでありまして、イギリスの土地の上で、という意味では15・16世紀にすでに、ということになりますが、そのイタリア商人達の実践がイギリスの商人達に採用されるに至ったかという決してそうではなかったわけであります。

先ほど、知識 vs. 実践という話をしましたが、17・18世紀くらいになると、教育の面では特にスコットランド、スコットランドでは実学的な教育が盛んでありまして、そのスコットランドでは簿記教育、商業教育が盛んに行われていたわけですが、しかし、これが実践として行われていたかという決してそうではなく、知識としては教育を通じてかなり弘まっていたのですが、実践の採用はまだなかった、ということでありまして、それは、事が足りていた、ということでもあります。これは株式会社という企業形態ととても関連するところがありまして、株式会社というオランダ東インド会社、イギリス東インド会社など、17世紀の初頭に先駆的なものがみられるわけですが、その後、色々なことがあって、一般化はかなり遅々として進まなかったわけであります。イギリスにおいて株式会社という形態が一般化をみるのは実は19世紀の半ば以降のことでありまして、これは複式簿記も同様でありまして、複式簿記というものが実践上、一般化をみるのは19世紀の半ば以降のことでもあります。株式会社という形態を必要とする大規模で複雑なビジネスが一般化をみていくと、複式簿記という洗練された記録システムでなければビジネスを管理できなくなる、という相関がみられる、というわけであります。

3. 日本における複式簿記の伝播

和式帳合と洋式簿記

さて、日本の話に入りますが、ここには和式帳合 vs. 洋式簿記という対比がありまして、日本古来の日本固有の簿記を和式帳合と呼び、帳合とは簿記のことですが、それに対して西洋式の簿記、洋式簿記というわけでありまして、この洋式簿記がいつ頃、日本に伝播をみたかについては諸説がありまして、古くは16世紀半ば、かの鉄砲伝来、種子島の頃に鉄砲とともにもたらされた、といっている研究者もおりますが、これはエビデンスに乏しく推測の域を出ていないとされておりまして、また、17世紀になると、平戸にイギリス商館、オランダ商館が設けられ、ご存知と思いますが、これは東インド会社の日本支店ですが、オランダ東インド会社の日本支店がオランダ商館で、そこではオランダの商人達が複式簿記、洋式簿記を行っていた、ということでもあります。さらにまた、文献についても、西洋の簿記書が日本にもたらされておりまして、外国商人と交流のあった九州の大名の蔵には当時の西洋の簿記書が残されておりますが、これが日本の商人達の商いの実践に影響を与えたかという決してそんなことはなかった、ということでもあります。

というわけで、一般には洋式簿記の日本への伝播は明治の初期と目されております。そこには

二つの文献の存在が認められるということでありまして、福澤の『帳合之法』、それからアレクサンダー・アラン・シャンドの『銀行簿記精法』、この2書の存在があるということでもあります。

なお、和式の帳合については、マニアックな議論としては、和式の帳合は複式簿記か、という議論がありまして、これはまた、複式簿記とは何か、という議論でもあるわけですが、諸説がありまして、江戸時代にも豪商、大規模に商いを行っていた豪商の場合にはかなりしっかりした帳簿システムというものを見出すことができまして、それをめぐる議論であります。詳細は割愛しますが、シナリオとしては4通りありまして、和式の帳合は洋式簿記の影響を受けて複式簿記となった、和式の帳合は洋式簿記の影響を受けながらも複式簿記とはならなかった、和式の帳合は洋式簿記の影響を受けずとも複式簿記となった、和式の帳合は洋式簿記の影響を受けなかったがために複式簿記とならなかった、といった諸説があります。また、これは簿記、会計の話に限ったことではありませんが、明治に関しては、明治維新が起こったとき、そこに歴史の連続を認めるか、あるいは断絶を認めるか、という議論がありまして、これが和式の帳合と洋式簿記の関係をどう捉えるかという論点と重なってくるということもあります。

そうした一般的な議論はさて置きまして、具体的な話としては日本における近代の会計の歴史において劃期の年とされているのが明治6年、1873年でありまして、この1873年に2書の存在を認めることができる、というわけであります。一つは福澤の訳した洋式簿記書、いま一つがお雇い外国人のシャンドが著した洋式複式簿記書でありまして、これがいずれも日本初のものとして刊行された年でありまして、そうした意味において銘記されるべき年というわけであります。

福澤諭吉の『帳合之法』

まず福澤の『帳合之法』ですが、この講演会では福澤を紹介する必要はありませんが、福澤には多くの著書、訳書がありますが、その一つにアメリカの簿記書の翻訳書である『帳合之法』があります。木版刷り半紙判で和綴じ本4冊から成っているこの『帳合之法』は二編構成でありまして、「略式」と題して単式簿記を扱う初編の2冊が1873年の6月、「本式」と題して複式簿記を扱う二編の2冊が1年後の1874年の6月にいずれも慶應義塾出版局から刊行されております。

この初編の単式簿記は single-entry のことでありまして、今日一般に単式と訳されておりますが、これを福澤は略式と訳しておりまして、この初編が日本初の洋式簿記書と位置付けられているわけであります。これはアメリカの簿記のテキストでありまして、当時のアメリカは実業的な専門教育が盛んに行われておりまして、色々な商業専門学校、実業専門学校が設けられた時期でありまして、福澤が用いた原書はこの当時、北米において大規模にチェーン展開をしていた専門学校のテキストであります。

ご案内のように、福澤は士族出身でしたので、のちに述懐しているのですが、「私の著書、訳書のなかで最も苦勞したのは『帳合之法』だった」といったように述べておりますが、しかし、福澤の訳書はいずれもそうですが、日本人の理解に意を払って巧みな訳がなされております。当時の場合は単に翻訳すればよいということではなく、文化的背景がまったく異なる日本人にも分かるように、良い意味での意識が随所でなされているわけであります。さらに注目されるのが記

数法でありまして、「日本流に書くと文字が長く、帳面も多くなって実用に適さない」と福澤は述べておりますが、従来の日本の記数法は定位文字を用いているわけでありまして。万とか千とか百とか十といった定位文字を用いて、これで長い数字を書くと大変でありまして、そこで福澤は漢数字の十進法縦書きという記数法を採用しているわけでありまして。これは劃期的でありまして、簿記書に限らず、この記数法はその後、広く一般化をみたということも注目されるわけでありまして。

また、この『帳合之法』の訳者序に該ところが有名でありまして、この序は「古来日本国中において、学者は必ず貧乏なり、金持ちは必ず無学なり」という文章から始まっておりまして、ここで福澤は簿記を学ぶことの意義を啓蒙的に説いているわけでありまして。ここで福澤は学者 vs. 金持ちという言い方をしているわけですが、ここにいう学者は教養人、インテリといった意味でありまして、他方、金持ちは商売人、ビジネスに従事している人といった意味でありまして、福澤によれば、教養人、インテリは商売を下賤なものとみなして、ビジネスに手を出そうとはしないし、他方、商売人、ビジネスマンは商売に学問は不要と考えており、これが日本の現況であるとされております。しかし、「この兩者をしてこの『帳合之法』を学ばしめなば、初めて西洋実学の実たる所以を知り、天下の経済、そして国力を増すに至らん」といったようなことをいっているわけでありまして、これはご案内のように、『学問のすゝめ』に示されている福澤思想の一具現というわけでありまして。旧来の学問観を否定して独立思想にもとづく学問観を示しているわけでありまして、そうした『学問のすゝめ』の学問観の一具現が『帳合之法』でありまして、本を読むことだけが学問ではないとして「帳合も学問なり」と『学問のすゝめ』においても述べているわけでありまして。

この『帳合之法』は当時、色々な学校のテキストとして全国的に用いられ、また、その後の多くの簿記書の範となっておりまして、福澤は「私は明治維新の直後に『帳合之法』という簿記書を翻訳しており、いま世のなかにある簿記書はすべて私のものに倣って書いたものである」と自慢をしているわけでありまして、この『帳合之法』が日本において実地に用いられることが自分の願いだ、といったことも述べているわけでありまして。ちなみに、その後、『帳合之法』に続いて、色々な簿記書が、翻訳書が多いのですが、出されておりました、その著訳者の多くが福澤の門下生、慶應義塾に学んだ者であったということでありまして。

しかしながら、先述の知識 vs. 実践という点においては、これがなかなか実践には至らなかったということがありまして、一つにはやはりニーズの不在がありまして、当時は従来の日本固有の和式の帳合で事が足りていた、ということでありまして。それにまた、従来、在来のものであった、という点も重要でありまして、在来のものであって、そして新しいものを用いるニーズはまだなかった、ということでありまして、次にお話するアレクサンダー・アラン・シャンドの場合、銀行の場合は、在来のものでなかったがゆえに、最初から実践として用いられることになるのですが、一般の商人については在来のものであり、そしてニーズがなかったため、なかなか実地には用いられなかったというわけで、これについても福澤は述懐しております。「自分は明治六年に『帳合之法』を刊行し、この本はよく売れたが、しかし、この『帳合之法』を商家の実地に用

いた者は甚だ少なく、がっかりしている」などといったことを書いているわけであります。

アレクサンダー・アラン・シャンドの『銀行簿記精法』

さて、いま一つがアレクサンダー・アラン・シャンドの『銀行簿記精法』でありまして、これは1873年の12月に大蔵省から刊行されておりまして、つまり福澤の『帳合之法』の初編と二編の間に出ております。著者はスコットランド出身のシャンドでありまして、スコットランドのアバディーン出身のシャンドは若くして来日してイギリスの銀行の横浜支店に勤務していたのですが、その後、お雇い外国人として大蔵省に雇用されておりまして、当時、明治新政府は、西洋に追い付けということで、西洋の諸制度を導入しようということで、その手段としてお雇い外国人というものを用いていたわけでありまして、当時、大蔵省が西洋風の銀行というものを設けようということになりまして、シャンドは銀行員で、しかも銀行の経理に通じていたということで、この新設が企図されていた銀行の会計システムの立案を主な任務としてこのシャンドを雇用した、というわけでありまして、シャンドは自らの実務経験とイギリスの諸文献に依拠してこの新銀行の会計システムを立案しまして、そのシャンドの報告書が大蔵省の同僚によって翻訳され、刊行されたものが『銀行簿記精法』というわけでありまして。

福澤の『帳合之法』の方は1873年の6月に初編が刊行され、これは単式簿記を扱っていたわけですが、日本で初めての西洋簿記書ということになりますが、ただし、複式簿記ではなかったということで、他方、シャンドの書は複式簿記書でありまして、『帳合之法』の二編よりも前に出ているわけでありまして、したがって、このシャンドの『銀行簿記精法』は日本初の西洋の複式簿記書というわけで、複式簿記としては日本初と位置付けられているわけでありまして。

ところで、やがて国立銀行条例という条例を受けて、1873年に設立されたのが第一国立銀行でありまして、これは日本初の銀行にして、日本初の株式会社と目されているわけでありまして、そしてこの年の末に日本初の西洋式の決算が行われております。シャンドの会計システムが用いられ、シャンドの簿記が実地に用いられ、決算がなされ、今日でいうところの減価償却などもこの当時からなされているわけでありまして。その後、第一国立銀行に続いて、各地に次々と国立銀行、すなわち発券銀行が設けられてゆきますが、その諸銀行はすべてシャンドの会計システムを実地に用いているわけでありまして、これは在来のもものがなく、また、ニーズがあった、ということでありまして。シャンドの場合は、福澤とは違って、実践として採用された、というわけでありまして。

なお、いま話題の渋沢栄一は第一国立銀行の設立の推進役でもあり、のちに頭取にも就任しているわけですが、この渋沢が各地の国立銀行におけるシャンドの会計システムの普及において中心的な役割を果たしたともいわれております。ちなみに、明治政府は明治15年に日本銀行条例を制定して、国立銀行による発券を廃し、発券はすべて中央銀行、すなわち日銀に集中するということをしておりまして、したがって、各地の国立銀行は普通銀行に転換することになりまして、この第一国立銀行は第一勧銀を経て、いまのみずほに至っておりますが、しかし、各地の銀行はその後ずっと、昭和40年代まで、このシャンドの会計システムにもとづく銀行会計シス

テムを用いてきていた，という事実があります。

かなり時間を超越してしまいましたが，また，最後は些か駆け足になってしまいましたが，以上でございます。ご清聴頂き，洵に有り難うございました。